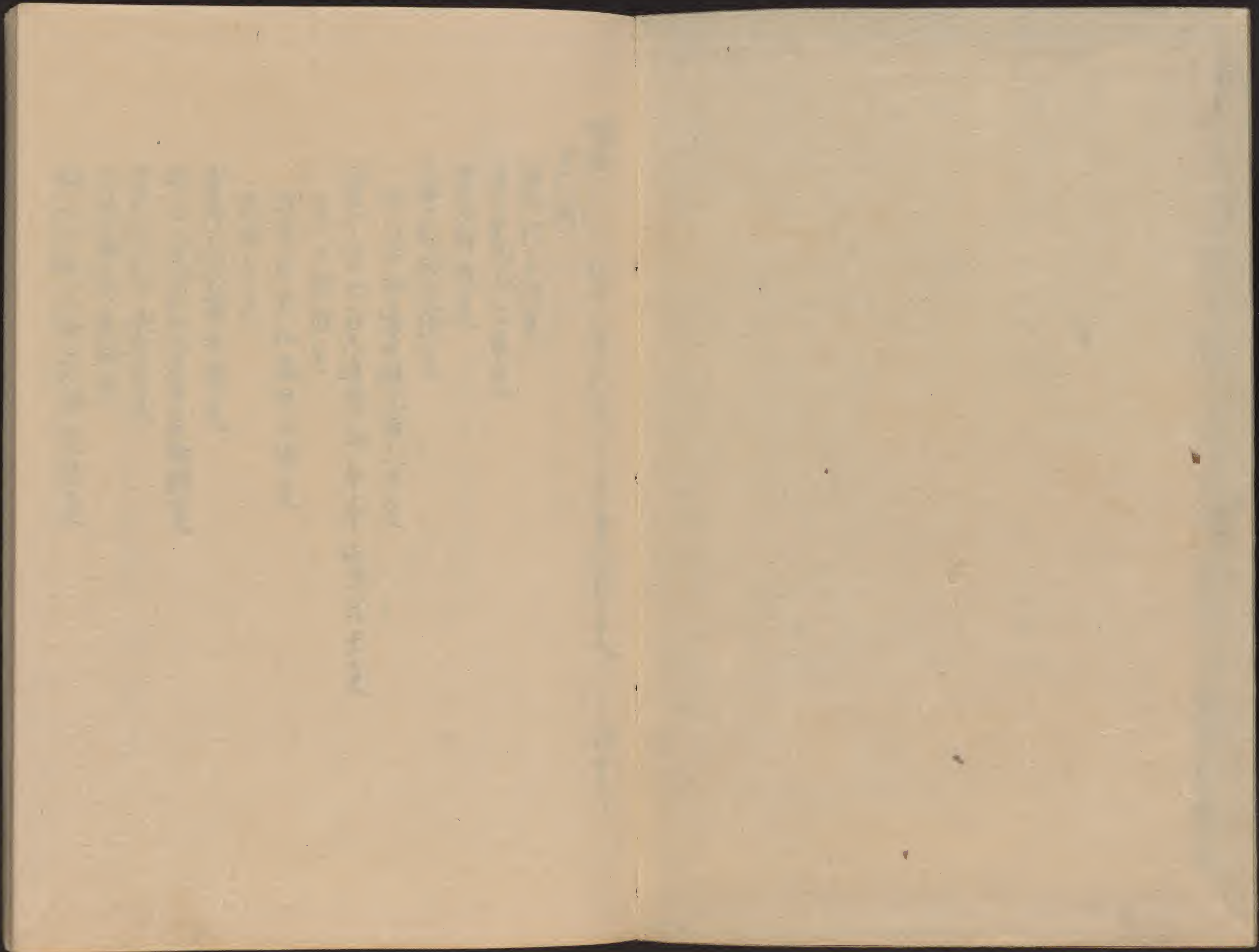


823
MEN

江入楚

明石

13



明石

十六歲

私十六歲此三月より十七歳此秋よりと一海なり

雨風狂不休更

自二条院沛伎来更

雷落廊焼更

又夢見故院給更

仕位若神導可避此浦之由更

三月十三日明石入道船御舟奉還源氏君更

言一日夢想更

源氏君来弘渡明石浦更

演説更更

書沛又令歸京使更

明石入道系源氏申音物語更

四月文衣沛装束更

石琴彈廣凌散更

明石入道系御前彈琵琶更

入道語吾娘能彈箏之由夏

入道又彈箏夏

入道語心中所願奉行住吉神及十八年之由夏

又之日遣消息行忌色宿夏

入道返哥夏

次日又書夏

明石上書返夏中

御門御夢奉見故院夏 三月十三日

二条太政大臣薨逝夏

八月十二三日比余濟馬出忌色宿於夏

對面明石夏

書於二条院

源氏書餘於二条院君同書給給夏

廿七歲

正月主上御藥夏

七月廿日源氏歸京之宣旨夏

明石上懷妊夏

六月より北平

歸京前二三日向明石上并合物音借別夏

於難波浦被夏

源氏二条院於夏

後本位任持大們之夏

之大將夏

八月十五夜初衆門之夏

使海之次書信懸於明石上夏

筑紫五節君奉入於源氏君夏

文王
武王
周公旦
管叔
蔡叔

史記八雷而一說無之 周公居東都二年天大雷電以風木
盡偃大木斯拔成王啓也 金縢書迎周公天乃反風木
起多文類聚 世家十三云周公旦者周武王弟也孝篤仁
異於群子及武王即位當輔翼武王用事居矣封旦為魯
公周公不就封留佐武王 武王克殷二年天下未集武王
有疾不豫周公於是乃自以爲質設三壇周公北面立獻璧
秉圭璧以礼

神主以爲執告于大王李文王告卜祝之辭也 史策祝策
周公所作之簡書也曰惟爾元孫王發躬當阻疾居爾三王
是有負子之責於天以旦代王發之身於是乃即三王而人皆曰
吉周公喜用簪乃見書遇吉周公入賀武王曰王其无害周公
藏其策金縢匱下藏之於匱緘之以金誠守者勿敢言明日
武王有瘳不欲人用其後武王既崩九年乙酉六年庚寅崩
太子誦代立是爲成王
成王少在強保之中周公恐天下圍武王崩而畔周公乃踐

阼代成王攝行政當國管叔乃其群弟流言於國云周公將不
利於成王於言於國以誣周公惑成王周公乃告太公望召公
奭我之所以弗辟而攝行政者恐天下畔周無以告我先王大王
季文王三王之憂帝天下久矣於今而后成武王蚤終成王少
將以成周我所以爲之若此於是宰相成王

管叔武庚等果章准夷而及周公及奉成王命興師東伐遂
誅管叔殺武庚於蔡叔

封弟叔鮮於麥封弟叔度於蔡 武庚殷紂子也祿父ト云
成王長能聽政於是周公及還政於成王々々臨朝周公之代成王
治南面倍依尺子負斧

依以朝諸侯及七年後還政成王北面就臣位 謹敬息如累然初
成王少時病周公乃自揃其蚤沈之河以祝於神曰王少未有
識行神命有乃旦也亦藏其策於府成王病有瘳及成王
用事人或譖周公々々奔楚成王發府見周公持書乃反及周
公々々歸

離周云秦既燔書時人欲言金縢之書或天其本來乃云成

王少時病周公禱何欲代王死祝策于府成王用爰人諗周
公○○奔楚成王設府見策乃迎周公
爰私去史記六雷而之沙法無之如何

尚書第七 金縢篇曰

武王有疾周公作金縢為諸命之書藏之於
匱緘之以金不欲人開

既克商二年王有疾弗豫也不悅豫也公乃自以為玁狁玁狁除地也公乃自以
諸命為已多為三壇同墠墠除地也史乃毋祝曰惟爾元孫某遭

一而虎疾若爾三王是有丕子之責于天以旦代某之身公歸乃納
冊于金縢之匱中王翌日乃瘳武王既喪管叔及其群弟乃流

言於國曰武王死周公攝政其才後叔及蔡叔霍叔乃放言於國以誣
公將弗利於孺子三叔以周公大聖有次左之周公乃告二公曰

我之弗辟我無以告我先王三叔則我無以成周道告我先王
周公居東二年則罪人斯得周既告二公遂東征以

二年之中罪人此得三監管叔蔡叔武庚也于後公乃為詩以

貽王名之曰鴛鴦王亦未敢誚公成王信流言而疑周公故
所以直誅之意以遺王猶秋大熟未穫天大雷電以凡

秋也木乃盡偃大木斯拔邦人大恐王与大夫盡弁以
啓金縢之書乃得周公所自以為玁狁代武王之說所藏

冊書木也二公及王乃同諸史与百執事曰信噫公命
我勿敢言今言之則王執書以泣曰昔公勅王家惟

弔冲人井及知言已知童不及知知今天勅威以彰周
公之德周公凡之威以王出郊天乃雨反風木則盡起郊

起王辭謝天即反凡二公命郊人凡大木取偃盡起而築
之歲之歲則大熟
爰私去史記六雷而之沙法無之如何
比說

私之河海三月一日上巳之拔之時風吹出之取尚
書ノ金縢篇ヲ我夕ノ頃ノ冬ノ末也但河海ノ本ニ
依テ不我ニ有之ハ

日ころふなりぬ

二月朔日より十日まで此中

きりかへりて

きりかへりて二説なれり

きりかへりて

雷風よりなる中いまだを退れぬ

きりかへりて

きりかへりてきりかへりてきりかへりて

きりかへりて

きりかへりて

秘

きりかへりてきりかへりてきりかへりて

きりかへりて

きりかへりて

きりかへりて

秘

きりかへりてきりかへりてきりかへりて

きりかへりてきりかへりてきりかへりて

秘

きりかへりて

きりかへりて

秘

きりかへりてきりかへりてきりかへりて

きりかへりてきりかへりてきりかへりて

きりかへりてきりかへりてきりかへりて

きりかへりてきりかへりてきりかへりて

きりかへりてきりかへりてきりかへりて

きりかへりてきりかへりてきりかへりて

きりかへりてきりかへりてきりかへりて

秘

きりかへりてきりかへりてきりかへりて

きりかへりてきりかへりてきりかへりて

きりかへりて

きりかへりて

秘

二条院

秘宗上より此御文より

200

秘以御史囊空乏乞取由乃記後曰

葉
葦笠りの種^みあつたうと

之ひそてあふ
畿河道乃ひちなり

を
筆日記に
みちいりし
ことあり

しなへてけり
答
玉摩子に所とわす

紀多傳

可然なるを以て此の如く
知るべし

今に名
貧乏

清名小

養心堂

少くとも
 秘ふより此の如く

交み約の中と交ふに重なり

[illegible]

秘いそふ字よてふらとわらんあ

鬱胸如不雲披

定家口奇以果為記狀の可也
 其

せしむる村ありく雲はしらく

萬壽無疆

うゝ風やいふはんそひやふ神うらなひしあゝ海方記うら

癸未玄心所

秘
あまのこころ

相像之秋如逐浪浮萍

ひきつらう
秘みとらふ

ふみういふさう物々
ふ次下を流しゆり深のど

古今の便
海の中

京にまじりて

秘史御史此

仁王

秘

七郎即城乃心して

河仁王

經云諸侯設若彼

安樂帝王欽喜

日月失度皇失度大風旱見賊

仁王經持統天皇御宇始渡来本朝此系

三月被仍仁王舍例

天曆六年三月廿七日 亥未 被行條時仁王舍

秘 日月失度亦八省失度大火燒国大水漂没大風吹殺

大々同然曰方賊来没回

一代一度 仁王舍 乙次才十五條時

當日大極殿儀式如御所舍 海濱師或系

并狀細言 外記史武部彈正忌東西廊謂之出后

朝座行香

上巳 已下系因如常 乙巳不 錯諸

三傳と法服新

中殿

南殿

大極殿

豐樂殿

武德殿

朱雀門

羅城門

西院

乙后

三倉

右政官

外記廳

中務省

式部省

民部省

兵部省

大藏省

宮内省

近衛殿

右京殿

左近衛

右近衛

左衛門

右衛門

左京殿

右京殿

東寺

西寺

聖神寺

南殿

中院

諸院諸宮各七僧自余皆三僧

標諸国六十六座也若京中北口座可被定凡可滿於百座

之故也 經云進諸臺法用 維那者所司請

和義は海系う我せり略し始ふ

神前より

うものふれ

うや海のもの

を

例

比

火雨雷電
イ木ニ才七
 毀諸吾人故天降電

唐德宗貞元四年戊辰
四月五日電落大如彈石

長和二年三月雷鳴冰降大如梅已上何ノ義ヲ爲ス

抄
 わさき
 仁王
 絶六月
 雨水霜雪

是教をうけしに
はるかに東征し
て

周乙此

此
辛
年
第
一
卷

二
 一
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

事は是か

いふに山は

死
聖
中
の
心
を
し
る
こ
と
は

[illegible]

此乃
 此乃

卷之四

松養子如以侍て来りて守るれり京の御出でなり

四

わねふとそ 書子ふとそ してなり

君を清くと云ふやうく
神原に云ひ下りて我々

衆も之ハ知ル也
 又之ヲ世カ知ルヘシ
 又之ヲ世カ知ルヘシ

新と松色を
 子に
 常
 心
 う
 源
 の
 足
 と
 へ

青弊又又の弊より

朝名大才家也公名曰維多乃之同父三神也

神具上簡男余中簡男余急簡男余三才續坐云是則正

吾明社之神切實所世一年辛後吾明社於甲申西

衣面非之小基說或神印曾依之

經旨明神守清氣之軀故神功
與氣新羅卒合可以

為敬也
松已上卷二終

卷
何名此羽林
維來凡
母と子
の
所
以
に
羽
林
切
實
に
新
羅

多しと云ふ時以て丹爲弊也明石入者

以歸來倚杖自歛息依頃

風定雲無定
杜詩
樓閣瘴
來雲似
墨洞庭
盡水如
天柳子
厚
風定雲無定
杜詩
樓閣瘴
來雲似
墨洞庭
盡水如
天柳子
厚

清冷殿，一間。因去年地震改造也。其東有廊及厠，樓之。

殿因改造也

そとに
あつた
心
を
し
る

あふれつてきりぎりす

と
り
の
し
り
く
は
る

秘史雜念とて水とあへて

金の戸をふけて

[Handwritten signature]

仙事に外中にと意

あまのこころをわすれぬ

之
と
し
を
し
し
し

海老川のついでに新橋をへて江戸

いふしんをひき

いそいそ

秘あまもれふて 吾曰

心月

源のち

海へはと林のききけふし新入の屋を以てはさるゝまじ
にあらざるの志けの屋を以てふやく屋のくくを以てさるゝ
で糸入の志けの屋を以てふやく屋のくくを以てさるゝ

已系大綱之九品此中乃下品也

五

須吾明神、
易、
玉、
擣、
此、
少、
戸、
忠、
臣、
海、
より、
い、
出、
た、
る、
家

祢りふふて海より又海中に龍王を此龍王
 は龍王をふとふと又海中に龍王を此龍王

よりさへふれぬといふ案の初又終紀より後の八百主
とを後のより紀へ八百主とより

秘

海より神は後古明神と云う又前より市井に就て萬の神
道は神をてふ所のふとを就てはよくとて又説きにも用ひ
と云いしや此に後約八百とすなり

す
頃吉の神ハ色小嬢
ふ
頃吉
ハ色
阿
以

512

秘
上知上忍を念誦し
始て有るさうに
法に

對之

[illegible]

支國字

一

ぞうしに却字なり
 へんていむそふん

あやふし風かた

抄明風

夫近きにはけりまうそふん

ねりやまればとこのおれられとふれしとふれしと
せくあふとふれしとふれしとふれしとふれしと

神のまへ

いづれはねとふれしとふれしとふれしとふれしと

まうもふれしとふれしとふれしとふれしと

あやふしとふれしとふれしとふれしと

抄明風とふれしとふれしとふれしと

のまふとふれしとふれしとふれしと

こふとふれしとふれしとふれしと

神明なる係りておれをふれしとふれしと

はくしとふれしとふれしとふれしと

あやふしとふれしとふれしとふれしと

神明なる係りておれをふれしとふれしと

あやふしとふれしとふれしとふれしと

神明なる係りておれをふれしとふれしと

あやふしとふれしとふれしとふれしと

神明なる係りておれをふれしとふれしと

あやふしとふれしとふれしとふれしと

あやふしとふれしとふれしとふれしと

あやふしとふれしとふれしとふれしと

神明なる係りておれをふれしとふれしと

あやふしとふれしとふれしとふれしと

あやふしとふれしとふれしとふれしと

あやふしとふれしとふれしとふれしと

神明なる係りておれをふれしとふれしと

あやふしとふれしとふれしとふれしと

あやふしとふれしとふれしとふれしと

神明なる係りておれをふれしとふれしと

あやふしとふれしとふれしとふれしと

あやふしとふれしとふれしとふれしと

抄

あやふしとふれしとふれしとふれしと

あやふしとふれしとふれしとふれしと

あやふしとふれしとふれしとふれしと

あやふしとふれしとふれしとふれしと

あやふしとふれしとふれしとふれしと

抄

あやふしとふれしとふれしとふれしと

あやふしとふれしとふれしとふれしと

神明なる係りておれをふれしとふれしと

凡の四のくちを幸あれふとわりして文曰
くひやうとを極くううふていひゆるれまうとてやと
かうらふいふまうわう
神官位もあつて又年齢もあつて

かへりまうすつていふとて

羽入道きつてあけふうてうらまうはくうていふと

もいひあつて人あつていふとていふとていふとていふと

いふとていふとていふとていふとていふとていふと

あつていふとていふとていふとていふとていふと

いふとていふとていふとていふとていふとていふと

いふとていふとていふとていふとていふとていふと

いふとていふとていふとていふとていふとていふと

いふとていふとていふとていふとていふとていふと

神退とは退体退ふていふとていふとていふとていふと

夫天子行ふとていふとていふとていふとていふと

因知進不知退周易の天子行ふとていふとていふと

何周易曰知進而不知退知而不知亡知得而不知喪其唯聖

人乎 老子經云不退有咎進不知退取禍之道也

唐史柴心元行可也

唐書見可而不退謂之懷寵に國之失也

字にくいのちとていふとていふとていふとていふと

後史河のふと 秘人あつていふとていふとていふと

いふとていふとていふとていふとていふとていふと

いふとていふとていふとていふとていふとていふと

いふとていふとていふとていふとていふとていふと

いふとていふとていふとていふとていふとていふと

いふとていふとていふとていふとていふとていふと

いふとていふとていふとていふとていふとていふと

因御をれ御をみよわつて 秘部へををわつて

いふとていふとていふとていふとていふとていふと

いふとていふとていふとていふとていふとていふと

いふとていふとていふとていふとていふとていふと

何はよのこもつる地を以て風乃をさううけりまらされし母
何れにやとあり

何れにやとあり 秘入道乃位を

秘入道のこもつる 秘をあられし母を以てありと自ら御定り

秘をあられし母を

秘乃風 秘乃風は入道は衆りし母のこもつる

秘乃風は入道は衆りし母のこもつる 秘乃風は入道は衆りし母のこもつる

秘乃風は入道は衆りし母のこもつる 秘乃風は入道は衆りし母のこもつる

秘乃風は入道は衆りし母のこもつる 秘乃風は入道は衆りし母のこもつる

秘乃風は入道は衆りし母のこもつる 秘乃風は入道は衆りし母のこもつる

秘乃風は入道は衆りし母のこもつる 秘乃風は入道は衆りし母のこもつる

秘乃風は入道は衆りし母のこもつる 秘乃風は入道は衆りし母のこもつる

秘乃風は入道は衆りし母のこもつる 秘乃風は入道は衆りし母のこもつる

秘乃風は入道は衆りし母のこもつる 秘乃風は入道は衆りし母のこもつる

秘乃風は入道は衆りし母のこもつる 秘乃風は入道は衆りし母のこもつる

秘乃風は入道は衆りし母のこもつる 秘乃風は入道は衆りし母のこもつる

秘乃風は入道は衆りし母のこもつる 秘乃風は入道は衆りし母のこもつる

秘乃風は入道は衆りし母のこもつる 秘乃風は入道は衆りし母のこもつる

秘乃風は入道は衆りし母のこもつる 秘乃風は入道は衆りし母のこもつる

秘乃風は入道は衆りし母のこもつる 秘乃風は入道は衆りし母のこもつる

秘乃風は入道は衆りし母のこもつる 秘乃風は入道は衆りし母のこもつる

秘乃風は入道は衆りし母のこもつる 秘乃風は入道は衆りし母のこもつる

秘乃風は入道は衆りし母のこもつる 秘乃風は入道は衆りし母のこもつる

秘乃風は入道は衆りし母のこもつる 秘乃風は入道は衆りし母のこもつる

秘乃風は入道は衆りし母のこもつる 秘乃風は入道は衆りし母のこもつる

秘乃風は入道は衆りし母のこもつる 秘乃風は入道は衆りし母のこもつる

秘乃風は入道は衆りし母のこもつる 秘乃風は入道は衆りし母のこもつる

秘乃風は入道は衆りし母のこもつる 秘乃風は入道は衆りし母のこもつる

秘言玄傳傳就解脫也

秘言玄傳傳就解脫也

秘の四乃をかりし母

此の書は、
 いれり乃る所
 拾遺集屏に
 新乃る人
 忠見所

秋にうつるにつれて、草木が黄葉を散らし、
いよいよ秋の深まりを感じ、心も静かになる。

舟より御車に参りしより
源の溪北破つらんはる程と
かのうはるを参りしより
舟中、舟中北平のれ

今原とわのふく
とみ
秘入道
日

月日此よりとくに之をてまうり
秘入道此後小う事に

毎よりより 異日 絶てあ 葉巻に 王 けく とい 29 とい
 之とい 入に 忠 あり 安 此 入に けく とい あり けく とい

[illegible]

月出乃御と後升
御とろいなりとろい
とろい

河をうへいそ源のかうしんはれきく経指ろさ海とま方の
家所れさ海とま

かに類乃厚んしむに市に
 中任祐ハ何うしにけりゝと云れ
 田舎にまてハ亭にけりしに
 今も云れ

[illegible]

伏せしととめしと
 せよふととめしと
 伏せしととめしと
 せよふととめしと

御
 いのち
 是とあるに事と今なれど何と云ふに

あひかりのふゆと春のふゆとをわかれ
ふゆとふゆとをわかれ

さういふと、海の家で半年と此船にのりつゝ
いゝやと、是より先きにPのうへに

二条乃流れあつたりしかるの
 なる御心とをなむ御心とをなむ

ふといつていともかりんこれのひしめしはらに書きあは
しふもあといふあてしめしめかひしよ今又さやれぬ久れ
わんいしめえともやれをいひしめあふともや
ふしめあはれふなりしめしめあふともやれぬ久れ
やめあはれていふせえさめしめあふともやれぬ久れ
あつしめえのふしめしめあふともやれぬ久れ
しめしめ入道れいしめしめあふともやれぬ久れ
しめしめいぬめしめしめあふともやれぬ久れ
しめしめいぬめしめしめあふともやれぬ久れ
しめしめいぬめしめしめあふともやれぬ久れ

いそふふふ

秘原とあてまつらんれん

ふすふふふ

入道れしめしめあふともやれぬ久れ

かきいしめい

秘原とあてまつらんれん

秘原とあてまつらんれん

秘原とあてまつらんれん

秘原とあてまつらんれん

秘原とあてまつらんれん

大はれ子もてい入道乃様世しや

うらむしめいしめい

いあしめいしめい

秘原とあてまつらんれん

秘原とあてまつらんれん

秘原とあてまつらんれん

秘原とあてまつらんれん

秘原とあてまつらんれん

秘原とあてまつらんれん

秘原とあてまつらんれん

秘原とあてまつらんれん

秘原とあてまつらんれん

秘原とあてまつらんれん

晉書嵇山康傳曰嵇山康字叔夜晉時譙國人也康所居之處每聞有人志
琴彈之曰為廣陵散也調絕倫遂以授康仍誓不傳人亦不言其
新叔云嵇康字叔夜晉時譙國人也康所居之處每聞有人志
悽切康及負不有人後復同志康更尋探見一髑髏蘆鑲眼眶
而生康見愍之乃收為好埋葬從是以去不同悽切之聲有頃
於夜中夢見一人曰我見伶人也然我骸骨散野為盧所傷不
堪痛切蒙憐愍愍荷德之深所相報今授廣陵散以酬 君德康
於夢中度之及覺宛然即得靈異志曰嵇康宿華陽亭操琴而
聞空中稱善中散曰君何不來此答曰身是古人豈沒出此數
千年矣聞君彈琴曲曲清和故來聽而就終殘毀不宜及以琴
授之作曲亦不常唯廣陵散絕倫中散受之誓不得教他人

或書云嵇康字叔夜，子期交善。子期縛屋至家，看為續精，被侵。叔夜容子期終夜，圍琴及半。夜深，骨骸付隍，來也。叔曰：阿

誰吾白莫怪拙堯時之樂士也名伶倫栖此處久矣然屋宇我
室中積有年夏之故來訢所以已汝為各絃之為幸爰授廣陵
散樂名謝云自是叔夜琴名大震于世矣晉帝詔叔願令授后
不應詔是以終被誅嵇康將刑東市顏視曰穎素琴而彈之曰
昔表孝厄掌以吾學廣陵散吾每新之廣陵散於今絕矣

彼爲名家

あはれ上のほろや

[illegible]

海老川のありき

秘
上
河
さ
き
ぬ
く
落
2
人
分
風
也

いふはよもや事とて此まのころはかくいふ世に
あつちあつち

休咎

秘入道代衆て

極永此愛經云郭此菩薩の事

秘曰

源乃京にるを以りしむる中へ

秘
海
北
平
心
子
子
子

ありて心をこころし
死者其吟心也并曰

あひ

あけ入道く

思ふといふは
 此とどりに
 不_{ヤス}

源の強し然るハ其

月之入道合琴孔為二琵琶第一

入首
五ふれりしは成

に五集を脱却の作あり

二、此乃係「子」之「子」

[illegible]

ひうハ首目れは也とむそありうへ
新田

20

此已見

入道此妙なり

一

秘
萬源の具一物もも入道奇物よそなり

何風俗通之業秦也或說之蒙恬所造五弦阮聲并涼二列箏形

如琴瑟多善箏者故云秦箏
秋名箏施弦高箏然或說漢秦帝

素女之下乃經乃聖之教也。心聖之造悲帝禁不得破之。

二十又經今人秦字被仍十二經今此第

又天竺妙仙通大主妙解澤也各部昆奈邪と云

いふは物にふふ論に中く春秋の筆

月
元
是
一
一

あひり紀より定家に見る高麗の紅葉もうづろ南此

とや乃秋此夕れと取るるれあり又誰をるるや

くさるはうとにちひ

秘笈

は
も
ま
ふ
う
ろ
さ
て
く
み
鶴
ふ
け
り
さ
う
て
道
如
か
ん

け一は、羽乃此溪乃家より此より此より海へ

とてふく又は時をよむれは七紅葉なるなり

志はふけい笑うさふの中をさけりてあられど

夢をゆめ

秘第几半の初

多士海内堂

并第巻に傳の次才と云り

和
意

筆
相
氣
足

母太皇太后親子女王

五
句

母
耳
白

子貞

每

日知錄

母寛子御女
伴甥
侍世守徳茂女

何或人雖云朱雀院と天皇帝に准もやいふ迄はさういふくれ
時代と云ふと明仁入道迄はさういふくくすゝ海や
若云彼迄は常御をせしと縁才子なるにあらはれぬ
まゝなるは此の傳受の記あるも才子にならぬ人
二代なりけや次治世と二代也と疑ひさるへしに

あやうきもの
秘入道女九半と云ふ

せん大王
并延喜九年と云ふ

記せんしと云ふ

秘一本系と云ふ記多しけり其後大皇と大皇の親王と云
御は延喜帝九半人そ親王に傳へりやと云ふは入道
九半人なりしと云ふと傳へる可なり

山九半と云ふに
何山依野依と云ふ世と云ふは山林
と云ふは延喜山依と云ふは

九半と云ふは女九半と云ふは
九半と云ふは女九半と云ふは

玄風と云ふは
何桑女御集と云ふは

いふはのしと云ふは

秘事不之引

いふはのしと云ふは

いふはのしと云ふは

いふはのしと云ふは

いふはのしと云ふは

いふはのしと云ふは

いふはのしと云ふは

いふはのしと云ふは

いふはのしと云ふは

いふはのしと云ふは

いふはのしと云ふは

いふはのしと云ふは

いふはのしと云ふは

いふはのしと云ふは

いふはのしと云ふは

いふはのしと云ふは

母文彦氏久
子嬰病為元

此乙主第更如血脉無所見但上古之師才不詳
後任者名人中於以多之此所謂係倭天皇第玄上宰相
大名富門留五里村上敦忠朝臣留比也木是也 或又相業

此人ありし時を流連耶地とれい血脉入るるをいふるなり

今女五文といふ所流るるよりいふるなり

秘製子に似血脈といふなり不我いふに取立て傳ふなり

矣女五文といふ所流るるよりいふるなり

斗なり

そいふ世よりいふるなり

倭所れ女五文の御説とけつて人

とあり今いふるよりいふるなり

いふる所れなり

いふる所れなり

ていふる所れなり

いふる所れなり

秘製子に似血脈といふなり

いふる所れなり

秘入道初

同明王上と云ふなり

いふる所れなり

秘製子に似血脈といふなり

あつて人の中よりいふるなり

秘製子に似血脈といふなり

いふる所れなり

いふる所れなり

いふる所れなり

いふる所れなり

いふる所れなり

いふる所れなり

いふる所れなり

いふる所れなり

いふる所れなり

秘製子に似血脈といふなり

いふる所れなり

いふる所れなり

いふる所れなり

白樂とけり乃月る小た近せり終て得陽

いふる所れなり

いふる所れなり

いふる所れなり

暫明ト之ヘリ

日向の上比巴よりとまゝありより入道源氏と澄子とありい
ふく山系を公第とやうあり

いそあそびに
あそびはこれと入道はこれ

秘多祿多乃救之

[illegible]

何に彼れを
 女れを入道れ

上
地
下

秘
上
地
下

ぬふめうゝゝと女と原へ糸をさへいと入道乃えととえ

秘原乃心

此其也よりと
秘入道とむせ給ふとありて是に

七
入道　　く　　め　　比　　也　　と　　川　　ら　　と　　又　　第　　と　　移　　う　　て　　せ　　て　　せ　　て　　す　　の　　よ　　と

年々
 年々

秘してとんとんふふふふふふふふふふふふふふふふ

しものせりやうね
みろりゆふさあふ

て
は
い

五
〇
位

中此祿小
中書 秘曰
秘 辰子

此書ハ乃心に之を以て是より下を以て

保勢水海坊

以倅イセ智乃ノ兮ウ英エ濃ノ交キ与ヨ起キ名ナ交キ友サ乃ノ之ニ保ホ加カ

比ヒ介ニ名ナ乃ハ利リ者ヲ也ヤ津ツ末ニ牟ニ加カ比ヒ也マ比ヒ呂ロ波ハ牟ニ多タ未ニ也ヤ比ヒ路ロ

年催
勢萬
海樂

明之此海乃其海之祥也

秘同

す
木
の
ち
ひ
く
ち
ね
よ
ほ
よ
き
い
ま
あ
ま
い

[illegible]

源氏

あゝ此道源のうといふふゝあつて

今と昔のちがひ

ふけふけふけふけふけ
ふけふけふけふけふけ

秘秋教長可同心

必教ノ字態教悩教巧と諺々々作爲る所々々々々々々々々々

ぞ志いもと云酒とつゝまゝにほん

人故承之くくて
不乃京氣と良和此と海と能之

6725

阿れと申すは、
あつた

源のゆかり

4
5
6
7
8
9
10

紗入道 只い乃後子て女れ多と尸に

松竹延年

科
子
付
る
よ
う

二十八年に

中
月
ふ
れ
下
ふ
一
金
月
々
あ

増北と十八歳と名ふる女と一組に新と名ふる女と

今年まで十八回

丹明之女此筆也小山物類多矣

紅粉委蛇

あはれふいふに

入道乃初ニ似合

を明の上はけりぬるしすけりぬるにえあひてはと

ひふふふふふふふふふ

入清に後世の爲と爲し

前乃烟之後のせと
つゝふと海と
是六時に辰刻の中は

功與中氣
後和也

毎これ人々をい

女の位もよく入道に可定と

三才圖會

秘入道

おや大良れ位とあや

秘入適此親

つゞくとの

秘決

秘
け入道ハ大匠れ子ヨそ
と中將リリと輝
て播磨守よ

成て終は彼玉をかりしと詠ふ

ふとそけいへゆるいふあふにうんそく

生れし時より死するまで

羽
乙
上
ル
ろ
ろ
C

夢夢あしこゝろなり 矢日

かくひけてあまのこゝろ
秘伝は本のうら

正徳三年
に色紙状より
年々良きもの
を類々

もあはれを代へぬの司とふらんはなれとさうにけり

[illegible]

世に此神あり

花坡松走後來薩院坐此如來七回小乙回

いふに多し故に神をせしむるにふりてとて

ひさのぶ

其の神のまはるるを

松動と我と連なりて
心より人なり

浪乃才に色
と見てゆる
私物とわらうとふくもさうと

うらみめて
入道乃とゆ

素色物とゆら
源と申れゆらふとて感と借と

よこしゆきつた
秘源のむき

くちくちゆきつた
秘系入道ノ約

ふくむに世界よりほくしゆい
と一年はさし師にわたりしゆい

志難しは後御心とや
とてとてとてとてとてとて

いふふはきり

秘
ゆきつた
いふふはきり

育れもの
とてとてとてとてとてとて

ゆるゆると
ゆるゆるとゆるゆるとゆるゆると

ゆるゆると
ゆるゆるとゆるゆるとゆるゆると

ゆるゆると
ゆるゆるとゆるゆるとゆるゆると

ゆるゆると
ゆるゆるとゆるゆるとゆるゆると

ゆるゆると
ゆるゆるとゆるゆるとゆるゆると

ゆるゆると
ゆるゆるとゆるゆるとゆるゆると

ゆるゆると
ゆるゆるとゆるゆるとゆるゆると

ゆるゆると
ゆるゆるとゆるゆるとゆるゆると

ゆるゆると
ゆるゆるとゆるゆるとゆるゆると

ゆるゆると
ゆるゆるとゆるゆるとゆるゆると

ゆるゆると
ゆるゆるとゆるゆるとゆるゆると

ゆるゆると
ゆるゆるとゆるゆるとゆるゆると

ゆるゆると
ゆるゆるとゆるゆるとゆるゆると

ゆるゆると
ゆるゆるとゆるゆるとゆるゆると

ゆるゆると
ゆるゆるとゆるゆるとゆるゆると

ゆるゆると
ゆるゆるとゆるゆるとゆるゆると

ゆるゆると
ゆるゆるとゆるゆるとゆるゆると

ゆるゆると
ゆるゆるとゆるゆるとゆるゆると

かきずるれぬ浪風を多く入道は信じてさうさうと地を

うらやまふや 原 信じて地を 原 信じて地を

あゝうらやまふや 原 あゝうらやまふや 原 あゝうらやまふや

あゝうらやまふや 秘 あゝうらやまふや 秘 あゝうらやまふや

あゝうらやまふや 秘 あゝうらやまふや 秘 あゝうらやまふや

あゝうらやまふや 秘 あゝうらやまふや 秘 あゝうらやまふや

あゝうらやまふや 秘 あゝうらやまふや 秘 あゝうらやまふや

あゝうらやまふや 秘 あゝうらやまふや 秘 あゝうらやまふや

あゝうらやまふや 秘 あゝうらやまふや 秘 あゝうらやまふや

あゝうらやまふや 秘 あゝうらやまふや 秘 あゝうらやまふや

あゝうらやまふや 秘 あゝうらやまふや 秘 あゝうらやまふや

あゝうらやまふや 秘 あゝうらやまふや 秘 あゝうらやまふや

あゝうらやまふや 秘 あゝうらやまふや 秘 あゝうらやまふや

あゝうらやまふや 秘 あゝうらやまふや 秘 あゝうらやまふや

あゝうらやまふや 秘 あゝうらやまふや 秘 あゝうらやまふや

まゐりあがりては 何れもなりて

せめていふれ 入道よれとて

あつてはなれとて 秘しにわかれ

もあつてはなれとて 秘しにわかれ

そつてはなれとて 秘しにわかれ

もあつてはなれとて 秘しにわかれ

今東源氏女は年々一系流乃御影とてわかれ

もあつてはなれとて 秘しにわかれ

そつてはなれとて 秘しにわかれ

もあつてはなれとて 秘しにわかれ

又つてはなれとて 秘しにわかれ

秘しにわかれとて 秘しにわかれ

白源乃いふとて 秘しにわかれ

御影とて 秘しにわかれ

信人とて 秘しにわかれ

秘しにわかれとて 秘しにわかれ

白源乃いふとて 秘しにわかれ

御影とて 秘しにわかれ

信人とて 秘しにわかれ

秘しにわかれとて 秘しにわかれ

白源乃いふとて 秘しにわかれ

御影とて 秘しにわかれ

信人とて 秘しにわかれ

秘しにわかれとて 秘しにわかれ

白源乃いふとて 秘しにわかれ

御影とて 秘しにわかれ

信人とて 秘しにわかれ

秘しにわかれとて 秘しにわかれ

白源乃いふとて 秘しにわかれ

御影とて 秘しにわかれ

信人とて 秘しにわかれ

源中

良渚の如くして明の上前の心

恒

秘良薬ふとのやにゆへり

秘入乃此方今中衆之世ト云ト是也

とる

乙巳

入痛此
止之
て
糸
せ
ろ
答
ふ
に

秘け女此の原のりうらに壹人となすや

英字ナニに
けりて
りて

秘曰

私相石上とふとがふと外
 信ふにふとふとふとふと
 京代事と

秘
け
上
と
あ
く
ふ
と

12

も
是
ハ
之
上
ル
ヲ

此書之出於此時也

2

秘
源の幸に

性果

秘
元
王
公
之
世
異
之

卷四

賈

北御子

私河後漢元帝后家氏上禮云

花よりけり後上幸此夢は桓帝此夢て花れつゝ花と
りあり事と云り略し凡そや帝のさうする事
おたはして花よりけり後上幸は桓帝と云はれ
たれるは延長五年西暦一〇六三年の事なり

見ろ此の夢

管相公此の字多帝御階に下りて

延康帝(下)云々 中をける 延康帝此花よりけり

あゝと云ふ

河敷文選 耶睨日本紀 睨 斜眼 密 桓仙

くこゆて

朱薙此夢中此神

源氏物語

弟の此神

いとわろし

朱薙此心

夢中より云ふこれ夢の中

云れこれ夢の中十日雨は對してあり

五巻の夜
夢中より
之時分
力に夢は

河因云解夢書曰 周礼六夢 一曰正夢 二曰噩夢 三曰思夢 四曰

寤夢 又云 夢六之懼夢

河海六夢此夢なり

松大船此夢なり

河海六夢此夢なり

此朱薙院此夢なり 此夢なり 三條天皇即位

乃後河年同ありて夢中より云ふと云ひて云ふなり 此夢なり

神 花よりけり此夢なり 又曰

河海六夢此夢なり

又曰此夢なり

河海六夢此夢なり

又曰此夢なり

神 二条太政大臣は弘中夢れ又云太政大臣は弘中夢れ

又云弘中夢れ 一云弘中夢れ

つこく小のつ

太政大臣は弘中夢れ

よりありて云ふ

太政大臣は弘中夢れ

河海六夢此夢なり

朱薙院此夢なり

河海六夢此夢なり 又云弘中夢れ

河海六夢此夢なり

源氏物語 弘中夢れ

河海六夢此夢なり

弘中夢れ

又云弘中夢れ 弘中夢れ

河海六夢此夢なり

弘中夢れ

世乃も云ふなり

神太右此夢なり

つにあらて

すれはほそとふ

私記 畏てなり

三とせとにともて

秘記 流移人

何毛詩云東山周公東征也周公東征三年而歸を夫之故
仍此詩也 五刑者杖徒流死也これハ徒之云と云

其流移此人ハ裁して歸者又三云とてゆふ事獄令乃
又犯多きと云れハ三とせとありこれハ人ハ惡名此也

む令書之獄令云凡流移人主配不六載ハ後聽仕即中死不
惡流而物配流者三載ハ後聽仕今案流移乃人ハ流移せ
れあふ人ハ云れハ六年此後ハ云役と云ふ事とゆふ例

流移乃科ノ及ハ人ハ配流者流移ハ三云此後
つとてとゆふ事今案氏君ハあつてある事とあり

除とれゆりス一ハ六云と云く三云とて出仕と云ふ
あふ三云とにともてハ三云と云く教ハ二又云と云く教と云ハ

虎罪ハ除せしめと免と云ふ事又云教と云ハ此を教
とハ八虎ハ下れを教と云ふ事と云くゆふ事

不毛ハ人ハ此れと云つと云ふ事ハ此れハ刑罰ハゆふ事
深氏君三云と云ふ事と云くも教免と云うてハと云くも幸ハ

御と云ふ事ハ人ハ此れハ刑罰ハゆふ事
あやまると又刑乃中に徒罪と云ハ後ハ人ハ此れハ刑罰ハ

せつと云ふ事ハ流刑と云ハ人ハ此れハ刑罰ハ
もすて役ハ此れハ事と云ハ後ハ人ハ此れハ刑罰ハ

秘 律乃一名例乃一云凡除名者官位勲位悉除課役任中色六
年之後聽叙免官者三載之後除先任二等叙唐律註除名

者官爵尽既除故課役本也免官免者免所居官
恩榮唯今源氏ハ除名と云ハ免官と云ハ人ハ此れハ刑罰ハ

人ハ此れハ免官と云ハ三年と云ハ人ハ此れハ刑罰ハ
と云ハ人ハ此れハ免官と云ハ三年と云ハ人ハ此れハ刑罰ハ

秘 秘右秘抄ノ奥進て動ハ今ハ下ハ人ハ此れハ刑罰ハ
後漢書卓傳云董卓死後其時牛輔既敗衆無所依欲各散

去李傕等恐乃先遣使詣長安求元救免王允以為一歲不
可再赦不許之 秘 秘右秘抄ノ奥進て動ハ今ハ下ハ人ハ此れハ刑罰ハ

佐とていふはふふよ 松元け左佐い佐佐小比ー朱薩と惠
帝にけいーいゝ惠帝ハ仁弱なり史記にもさくは朱薩もいふ
ゆるくおつーゆとさ佐乃崩とれて後佐佐れきに政と
て忠臣多く花ーいゝと惠帝れいやりーいゝと朱薩を
似ーい

御りやともいふ海へふ 朱薩れれ同とさ佐乃病とありまに
あーにさまいり秋を 是ーい又あーれ海乃祥とさ
甲う祥とさ佐やよ 海の御心申し月とされいゝと

中く御心うにけくさなり
こち系とせーい 秘女をこれ人さつーせよと
ゆしめ 秘これ女なり

あらとていふなり あーれ上のい
秘一任四ヶされ人なりの人よーいけく事ハハ一たよめ
人へもさるされさん 秘自然御言文もさつーいゝと
ねいけいへ系とせーいけいされとさゆーいさぬさぬ

りーいりーれとらふふふふ
おーいりれとらふふふふ 又母れよのつれ人ーいゝと
さふふふふふ

よーいりてさくはと月 世ふさつーいゝとらふふふ
をせよさつーいゝとさつーいゝとさつーいゝと
るさつーいゝと二葉のまにさつーいゝと
秘世中にさつーいゝとさつーいゝとさつーいゝと

せれ事とあつて親乃ーいゝとさつーいゝと
秘世にさつーいゝとさつーいゝとさつーいゝと
事とさつーいゝとさつーいゝとさつーいゝと

あひなとさつーいゝと 秘日
松さつーいゝとさつーいゝとさつーいゝと
さつーいゝと 海の佐佐れらみーいゝとさつーいゝと

あつれ中にさつーいゝと 是さつーいゝとさつーいゝと
さつーいゝと

おや毎らハしられと一月

いほ源のくわらゝあるに林は新し

いふとあらわしむきふんせなりて御ふとあぬさゆあらん
いふ源とておんたふとあらんといふとと林は目よんてあを
のちとあらんて人あ御ふといふとあらんてあらんてあらん
とあらんてあらんといふとあらん

思ふこれ乃波の手に

源をあらにあらんてあらんて入道は新

思ふこれ乃波の手に

入道乃春日とあらん

思ふこれ乃波の手に

思ふ乃母をあらんてあらん

入道とてあらんてあらんてあらん

思ふこれ乃波の手に

才子とは春屋といふとあらん

思ふこれ乃波の手に

思ふこれ乃波の手に

共八月十日とあらん

思ふこれ乃波の手に

思ふこれ乃波の手に

思ふこれ乃波の手に

思ふこれ乃波の手に

思ふこれ乃波の手に

思ふこれ乃波の手に

思ふこれ乃波の手に

思ふこれ乃波の手に

思ふこれ乃波の手に

思ふこれ乃波の手に

思ふこれ乃波の手に

思ふこれ乃波の手に

思ふこれ乃波の手に

思ふこれ乃波の手に

思ふこれ乃波の手に

思ふこれ乃波の手に

思ふこれ乃波の手に

思ふこれ乃波の手に

思ふこれ乃波の手に

思ふこれ乃波の手に

思ふこれ乃波の手に

思ふこれ乃波の手に

思ふこれ乃波の手に

思ふこれ乃波の手に

思ふこれ乃波の手に

思ふこれ乃波の手に

思ふこれ乃波の手に

思ふこれ乃波の手に

思ふこれ乃波の手に

思ふこれ乃波の手に

思ふこれ乃波の手に

思ふこれ乃波の手に

本多く 秘本あると云つていふ人なる人
いふに而 秘本あると云つていふ人なる人

秘本あると云つていふ人なる人

海にわつていふ人なる人 秘入道乃後此家ハ此方より海へ 矣曰

これいふ人なる人 秘入道乃後此家ハ此方より海へ 矣曰

いかにわつていふ人なる人 秘女あると此後寝よむいのかれ

あつたに記となり

三昧堂ちつて 秘入道乃おこいひつと然

ひとあはれせさる ありれよ乃なり

月い進つたす此の戸から ありなり

いふ此の戸をよむいふいふとあけぬ秋乃後人

定家は乃を表紙にいふいふとあけぬと云う月入

入道氏より守戸にうつけてあつたふを原氏小戸に

いふいふとあけぬいふいふとあけぬいふいふと

いふいふとあけぬいふいふとあけぬいふいふと

いふいふとあけぬいふいふとあけぬいふいふと

いふいふとあけぬいふいふとあけぬいふいふと

いふいふとあけぬいふいふとあけぬいふいふと

いふいふとあけぬいふいふとあけぬいふいふと

いふいふとあけぬいふいふとあけぬいふいふと

いふいふとあけぬいふいふとあけぬいふいふと

いふいふとあけぬいふいふとあけぬいふいふと

いふいふとあけぬいふいふとあけぬいふいふと

いふいふとあけぬいふいふとあけぬいふいふと

いふいふとあけぬいふいふとあけぬいふいふと

いふいふとあけぬいふいふとあけぬいふいふと

いふいふとあけぬいふいふとあけぬいふいふと

いふいふとあけぬいふいふとあけぬいふいふと

いふいふとあけぬいふいふとあけぬいふいふと

いふいふとあけぬいふいふとあけぬいふいふと

いふいふとあけぬいふいふとあけぬいふいふと

守にいのちをいそぐ人

秘事み地

あつたより今も物乃心を知らぬ人

ちね本下此むとみしれよの 秘明の上奥へ入るる源

れをいいて入るる人 秘事み地はたのわくつてはた

高れにうへへあること 秘げね入道れ物乃よせと事と

秘事み地と事とふとありすありしあつた入道れ物乃

しつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

うふ人とつとつとつとつとつとつとつとつとつと

とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

秘源のすへ源のすへ源のすへ源のすへ源のすへ源の

れとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

ねとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

いふとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

あつたより今も物乃心を知らぬ人

秘事み地と事とふとありすありしあつた入道れ物乃

しつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

うふ人とつとつとつとつとつとつとつとつとつと

とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

秘源のすへ源のすへ源のすへ源のすへ源のすへ源の

れとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

ねとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

いふとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

あつたより今も物乃心を知らぬ人

秘事み地と事とふとありすありしあつた入道れ物乃

しつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

うふ人とつとつとつとつとつとつとつとつとつと

とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

秘源のすへ源のすへ源のすへ源のすへ源のすへ源の

れとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

ねとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

いふとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

秘
収
音
心
角
心
心
心

松之山より金づるふるハナ

愛しく思ふは、
 一に海をくぐりてとみたり
 一に舟あそぶなる
 一に俗よりともな物なき
 海へくつゝたれどさびし
 くと不極よいかねといふに

かゝるからなるものなり

秘源の心弁と前より此後と

松江千吉くく満居とて此の卯又びくくにうりば
又入道れの中おくとやうくくく是とて

御心さしれちりしむる

[illegible]

とやと定ちるはるるあふと

子とていふに、亦れ也と

秘
少人々此狀乃和方也

ちやふぬなりとて思ふに福の事とぞ一とせり
 ちやふぬなりとて思ふに福の事とぞ一とせり

私あゝ入道は源のよきけりなり
新はききり祢はききり知

[illegible]

御文に於いてやうふをある

秘し経をたふし北御文あり

事之後即乃入之也

あいにいふのふや

秘要子集

も京乃中よりおとけし
くさいのよとて

あにそふと

入道之門

清史とて多うと云ふ

4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524
 525
 526
 527
 5

を女にまゝりて後乃御出と

不_レ知_レてな_レぬ_レや_レう_レく_レぞ_レ

私中式乃嫁娶之儀乃便之に之福を乞ふ

乞へり此御後所又妹共のふりしに

とてふを入道と爲はる

後亭

以候之源の時を思ふよしありて

(1)

後之鉞

耕乃在取前よりや多く入るゝ

物といふれどあるや

其源の例を述し

を人妻とのいさゝくにせんとす。并乃初

私不及引升

おのゝかり

秘宗のまゝとてのまゝのまゝとて

も流れてもてあふれぬまゝのまゝのまゝのまゝ

うゝまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

宿るまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

うゝまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

あけまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

二条のまゝ

秘宗のまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

しりぞきみふりて明ふれば
神妙事よつけても　くふ河とよよと記てらん　友は只
しりぞきしとあつと　しりぞきしと

なふとなく　くふ河とよよと記てらん　友は只
金少は神妙事よつけても　くふ河とよよと記てらん　友は只
わ　くふ河とよよと記てらん　友は只

わ　くふ河とよよと記てらん　友は只
わ　くふ河とよよと記てらん　友は只
わ　くふ河とよよと記てらん　友は只

わ　くふ河とよよと記てらん　友は只
わ　くふ河とよよと記てらん　友は只
わ　くふ河とよよと記てらん　友は只

わ　くふ河とよよと記てらん　友は只
わ　くふ河とよよと記てらん　友は只
わ　くふ河とよよと記てらん　友は只

わ　くふ河とよよと記てらん　友は只
わ　くふ河とよよと記てらん　友は只
わ　くふ河とよよと記てらん　友は只

わ　くふ河とよよと記てらん　友は只
わ　くふ河とよよと記てらん　友は只
わ　くふ河とよよと記てらん　友は只

わ　くふ河とよよと記てらん　友は只
わ　くふ河とよよと記てらん　友は只
わ　くふ河とよよと記てらん　友は只

わ　くふ河とよよと記てらん　友は只
わ　くふ河とよよと記てらん　友は只
わ　くふ河とよよと記てらん　友は只

わ　くふ河とよよと記てらん　友は只
わ　くふ河とよよと記てらん　友は只
わ　くふ河とよよと記てらん　友は只

あそこのもろく

秘傳のりよりてもう時を中く一の云と

あつたしものよとて

とてうろそひしうと

やに驚いてしつせられぬ

とやくとくあれ出するわう一匹のふつ一匹

はつたに 源ふしうとささぬしを記し

あつたは月日にそく 秘傳のふ中し

あつたは月日にそく

秘傳のふ中し

秘傳のふ中しとてささぬしを記し

あつたは月日にそく 秘傳のふ中し

あつたは月日にそく 秘傳のふ中し

あつたは月日にそく

秘傳のふ中し

あつたは月日にそく 秘傳のふ中し

あつたは月日にそく 秘傳のふ中し

あつたは月日にそく 秘傳のふ中し

あつたは月日にそく 秘傳のふ中し

あつたは月日にそく 秘傳のふ中し

あつたは月日にそく 秘傳のふ中し

あつたは月日にそく 秘傳のふ中し

あつたは月日にそく 秘傳のふ中し

あつたは月日にそく

秘傳のふ中し

あつたは月日にそく

秘傳のふ中し

あつたは月日にそく 秘傳のふ中し

あつたは月日にそく 秘傳のふ中し

あつたは月日にそく

秘傳のふ中し

あつたは月日にそく 秘傳のふ中し

あつたは月日にそく 秘傳のふ中し

あつたは月日にそく 秘傳のふ中し

あつたは月日にそく

秘傳のふ中し

あつたは月日にそく

秘傳のふ中し

あつたは月日にそく 秘傳のふ中し

あつたは月日にそく 秘傳のふ中し

あつたは月日にそく

秘傳のふ中し

あつたは月日にそく 秘傳のふ中し

右大倉北河津しとあり

秋後良是大倉北父

弟香殿乃女河津ハ秋良是乃妹也

おとしこんとむすれ

秋後今上と申は己年二歳

東宮小しとハ

冷々流し 秋日

ゆりされぬふとさういぬ

源の功海乃さういぬ

こそいりぬと河津の幸に

前よを能れさういぬふとさ

なやとぬふ

さういぬを能れさういぬとてさういぬ

さういぬのさういぬとさういぬ

さういぬとさういぬとさういぬ

は黒志とくちとくちと

さういぬとさういぬとさういぬ

ししししししししししし

ししししししししししし

せられぬとやうなぬのさういぬとさういぬ

いししししししししししし

さういぬとさういぬとさういぬ

七月廿金目

源瑞宗の書

ししししししししししし

ししししししししししし

はわれしと

秋つ井小しとさういぬ

式抄さういぬ源乃ん

のつりり

源乃ん中にしししと源京さんとさういぬ

はせとさういぬとさういぬ

小いふれし

さういぬとさういぬとさういぬ

うはと源京れさういぬとさういぬ

入道とさういぬ

くさしとさういぬとさういぬ

とさういぬとさういぬとさういぬ

あしとさういぬとさういぬ

そのはとさういぬ

源京ちとさういぬとさういぬ

六月とさういぬとさういぬ

秋日とさういぬとさういぬ

さういぬとさういぬとさういぬ

私

あやうくなや

源京ちとさういぬとさういぬ

あやも物さへ

秘一せ海よのそいれあしと記と

又とあやうくあううふさき宿園なりと足さ

女ハとくすいふ

けは内ふとくしと深き極あるを嫌く

さよ又御用余れををれし一版といふ記

いふとつりあや

まよ地

終りいふあやうあ

秘秘を由り一時きやふ時さうて

ゆつとくおのさうい浦を又うりんをさ半とさ

記あまひれにーか名おさし記と

さやぬく

以後おれりつささいなりしと

あしれ入道候りくれて

も六月とらて七月は成

又七月れりや記さ六六月とさ次細は記さあしれ

命れ守ふとつり初秋也

秘七月は記さ人記なりて此書文とつり初秋乃さ後

私矣秘多を七月乃らて八月小記とふ記

七月サ余白かさ〇室おれ後よりささうあうあうーと

なまやふ

秘源乃い

さゆさまわしーとれあう

源乃明ふと名おさうさう

さしーと新乃さ記とささうさうさうさうさうさう

ふささふく

秘惟定なり

月おさけあふ

秘明ふとるをさいさう

いさあやうくに

さハふささうとれおのさうと月

はささうとさうさうさうさうさうさうさうさう

お初さうと

秘良清くささふとさう

を少初さ良清くさ源お初さささささささささ

ささいさそれとの記さささ記あふさうさうさうさ

あがさ

秘良清くさおとささしとさささ

あささ

秘あささ

必源氏君明後日帰京ささささささ

ささささささささささ

前ささささささささ

ささささささささささささささ

よりくききく記

ききくききく記

ききくききく記

ききくききく記

ききくききく記

ききくききく記

ききくききく記

ききくききく記

ききくききく記

ききくききく記

ききくききく記

原

ききくききく記

ききくききく記

を

ききくききく記

ききくききく記

ききくききく記

ききくききく記

ききくききく記

ききくききく記

ききくききく記

ききくききく記

ききくききく記

ききくききく記

ききくききく記

ききくききく記

ききくききく記

ききくききく記

秘為言れ女院第れり

ね唯今れもあはれと為され第ハあ時を以てふなり
源乃ふは明なれとぞいふくのみぞ

いふわ
源のふ中にもあはれとぞいふくのみぞ

いふわ
あはれとぞいふくのみぞ

あはれとぞいふくのみぞ

あはれとぞいふくのみぞ

あはれとぞいふくのみぞ

あはれとぞいふくのみぞ

あはれとぞいふくのみぞ

あはれとぞいふくのみぞ

あはれとぞいふくのみぞ

あはれとぞいふくのみぞ

あはれとぞいふくのみぞ

あはれとぞいふくのみぞ

あはれとぞいふくのみぞ

あはれとぞいふくのみぞ

あはれとぞいふくのみぞ

人間

原

と明

うらまを海にこれに浦原の海をよとさいやうかれ
む打まてゝ海には浦原をよとせり

と明

年神川に海をよとせりこれに浦原の海をよとせり
む打まてゝ海には浦原をよとせり

と明

井もよとせり海には浦原の海をよとせり
む打まてゝ海には浦原をよとせり

と明

井もよとせり海には浦原の海をよとせり
む打まてゝ海には浦原をよとせり

と明

井もよとせり海には浦原の海をよとせり
む打まてゝ海には浦原をよとせり

と明

井もよとせり海には浦原の海をよとせり
む打まてゝ海には浦原をよとせり

と明

井もよとせり海には浦原の海をよとせり
む打まてゝ海には浦原をよとせり

と明

井もよとせり海には浦原の海をよとせり
む打まてゝ海には浦原をよとせり

と明

井もよとせり海には浦原の海をよとせり
む打まてゝ海には浦原をよとせり

と明

井もよとせり海には浦原の海をよとせり
む打まてゝ海には浦原をよとせり

と明

井もよとせり海には浦原の海をよとせり
む打まてゝ海には浦原をよとせり

と明

源
うゑにそふりきあふの日に學びて中れに病むと
抄
ゆゑにそふりきあふの日に學びて中れに病むと

秘
物さくくもにもあはれん
美物さくくもみそあはれん

さうして、みふとあつらんといふうへで、つゝねんを
和歌京あつて、まのわらんといふうへに、ねんを分れいさ
うなつるねんをうへといふねん、あつ明の上にあつ

心手相忘

秋今入道乃其にさへ

御方になれぬと

たは程身にふみれぬ所を

とるはてそわはるる

守仁

今一平に衣をしていて

秘
通世乃方乃しと心也

私書家入通乃々々に色糸をぬり

い
は
な
り
の
う
た

史傳話

世々うゑにうゑの心めとありてけけうと之にそふ

とく成海をせといふは海よりよくいふ色にうき世
を心取て彼界の人喜ばるとよふ討しるゝ

秘
け履ハ今世をいつく只交をえきくさふし

私志
心
は
し
ん
ん
ん

心乃造化之機

笑ふやうな子とてふ

渚より小道に兼りハ是よりけて娘のみとぞ
 下とぞや

人志親乃心去辱にあつても子成らずまゝといふ

明の上りてふとふとふと

私に此書よりとるべき所と云ふところありふ多しは

玉乃さゝいまであゝ新しき

五三十一五三十一

秘
し
と
あ
れ
半
と
は
ち
に
は
し

和歌をよみしむるに
あまのうたはなほ
あまのうたはなほ

又とちあよみのなにもするにけり
うんそく

いとうのふれと

源のふ

こころをあらわして

秘源

た
な
ん
と
そ
ふ
ふ
ふ
れ
あ
く
る
と
ふ
と

かゝる

秘傳の初に懐妊乃事

いふそふ

秘
ヤ
々
々
々
々
々

そしけしき

秘羽之上とやうてむくて見ゆくーけしき

又さうして見るさうしき

原
文古出ーまればけさにもさうやとーゆふ海とあまねる秋

年ハ義あり

とまのこい

原のさぬなり

うーゆふりく次

原のさぬなりとて入道れいへー年とては海と

うーゆふり

さししれんり

明ふとく

力れうさとりとめて

明ふとハ力れ様の及ふぬと推され候也

うーゆふりさすれとさうとてぬふ

海の明今ゆふは明ふとさうとぬふさすハさすハ

さすハさすハさすハさすハさすハさすハさすハ

さすハさすハさすハさすハさすハさすハさすハ

せんうーゆふりさすハさすハさすハ

あけさうゆふりーせんうーゆふりさすハさすハ

あまもさすハさすハさすハ

あまのゆふり

さうーゆふりー秘入るにあまゆふりーて入るハさすハ

て何合とぬさすハさすハさすハ

あれさうや

入るハさすハさすハさすハさすハ

あまゆーゆふり

あまのゆふりー明ふとハ後よのさすハ

あまのさすハさすハさすハさすハさすハ

さすハさすハさすハさすハさすハさすハ

あまのあまの

入道ハさすハさすハさすハさすハ

あまのさすハさすハさすハさすハ

なけさうさすハ

あまのあまのさすハさすハさすハ

さすハさすハさすハさすハさすハ

あけさうて

さすハさすハさすハさすハさすハ

あまのさすハ

さすハさすハさすハさすハ

あまのさすハさすハさすハさすハさすハ

さすハさすハさすハさすハさすハ

あまのさすハ

あまのさすハさすハさすハさすハ

あまのさすハ

あまのさすハさすハさすハさすハ

了る母をうけて

清心也

松竹を憐念し萬忘却するを才あるは羨す所なり
月夜にいてさやあふる物也 笑入道筆

秘入
石
子
に
物
字
を
入
れ
て
行
く
と
ハ

よーを思れうそハ
何うあれあさうあるぞいけるぞ

入道なることしむしむなりてと云ふより傳の御由來は此
うゝ傳乃臨すて入道申あつたとの傳歟とあるを傳
つてもそのうちに傳と外ありあるといふ所傳來とて傳れりと
傳

君兮難波小渚兮

秘
乞
う
海
の
中
と
う

和是より後の御系は神よりなり難波よりその後之は
 朝波は後よりなり御後のをよとにほひ代り
 此後乃左にかりなりとあり

すゝく

[illegible]

これこそ方へ沛沛系あまハいそくそ
小中が分沛とく之々
何道途也

行道也

信者へと書きたるをうけて道達ハ志りぬ
 いそいでけいね 保の入道

保の入洛

文苑人

源の御西より人ともあり

女君といはれぬのよおのりよそつる家

支那出京の時令にふりあひてはるる清方しりす御と
いふらんやに 是のこれ秘ひともいふるさふと
とらんぬれあふと 秘をう髪のはにひひと

秘をう髪のはらぬを

御心成

涕の涕心志痛つゝ毎々

2 彼あに
3 3
4 4

明正此心之公是公非

張氏

秘
と
に
は
れ
に
し
を

あゝあゝ

秘
明
之
上
九
子
上
紫
上
上
清
う
来
て

あまのこやこやう

源の明と此と多し

此書をうけぬふれをうけぬ人としておるを口にするは

呂氏春秋

何大御之正負令云日人相富位三位寛平為正二人其後得食
加場言金沛亨初為十人 天武天皇元年改沛亨于時三人
為大御言 淳和天皇天長八年三月八日菱野始任於大御言
永觀之年八月佐置四人 長和二年六月又置五人右系統
更加任
又慶雲二年四月十七日初云依食負令大御言四人藏尊既
比大位任中御云三人以補大御云不豈同日初大御言二負
為更置中御云三人以補大御言不足也乃至于中御言云者
是令外也云に正負者太政大臣左大臣各一人大御云二
人中御云三人系藏八人合十六人寛平末藏御也云に正負
代々時小よりて加場多し且大御云坊城更見端仍之源氏權
大御云加任をられりて每人一り即此大御云と權左大御云と
ゆゑ無念事くされりて 外此大御云とより人し權左大御云
と明く應しに權左大御云此負數より加任をられりて

何大御之正負令云日人相富位三位寛平為正二人其後得食
加場言金沛亨初為十人 天武天皇元年改沛亨于時三人
為大御言 淳和天皇天長八年三月八日菱野始任於大御言
永觀之年八月佐置四人 長和二年六月又置五人右系統
更加任
又慶雲二年四月十七日初云依食負令大御言四人藏尊既
比大位任中御云三人以補大御云不豈同日初大御言二負
為更置中御云三人以補大御言不足也乃至于中御言云者
是令外也云に正負者太政大臣左大臣各一人大御云二
人中御云三人系藏八人合十六人寛平末藏御也云に正負
代々時小よりて加場多し且大御云坊城更見端仍之源氏權
大御云加任をられりて每人一り即此大御云と權左大御云と
ゆゑ無念事くされりて 外此大御云とより人し權左大御云
と明く應しに權左大御云此負數より加任をられりて

人并及知今天勅威以彰因云之德後雷凡之威以朕小子其迎

我玉家礼亦宜之王出郊天止雨及凡木則盡起二公余邦人
凡木所偃尽起而築之歲則熟而書 寒之更煖拓樹復榮續曰

源氏物語云 源氏物語云 源氏物語云 源氏物語云

源氏物語云 源氏物語云 源氏物語云 源氏物語云

源氏物語云 源氏物語云 源氏物語云 源氏物語云

源氏物語云 源氏物語云 源氏物語云 源氏物語云

源氏物語云 源氏物語云 源氏物語云 源氏物語云

源氏物語云 源氏物語云 源氏物語云 源氏物語云

又佐とありてんと是もとてあつたなり
 又佐とありてんと是もとてあつたなり
 又佐とありてんと是もとてあつたなり

梅のつぼみ

秘而中々親意を十二支なりけハ杉並此興之と

便

[illegible]

日本紀に海神と云て万葉に海神と云る
新神に山神と云ふ日本紀に山神と云ふ
なりしを源氏物語に云ふなりしと云ふ

日中記元宮

私に半あやまりぬ。我多ぶとあり。俗不可と。

いふにふれとらん
よせぬはしる

非後

相信

望海

うゝやまふのいつて 古今集を秋萩よりゆきとれりてを
百葉十之葉ふと云れりうゝやま 古也奇曰十七よりふい
うゝやまふのいつて

五子先生集

まうしぬううういふ時あまのれきれきみゆれ
をを神宮造替の事とちおたよひしれきれはか一年とて
ゆうううううううううううううううううううううう
色とを初給ふゆういふに倅并諸倅并母を天れ御柱を
うううて一面を色りふうううううううううううううう

御さうや煙子ねえいねえにききとせとねえとゆり八の
面ときて回文もほりふといふ文様といふお遠をるおや
界わうあつんといふ人の文様と造幣年限の文やと各々
妙はみふあつんあふといふ人の文様と造幣の義を
何古人の文様を神宮造幣十二年週年とせぬといふあれと
年れふといふお遠もこれ又いふといふや堀川院百首よ
ういふ文様と天ての神の文様とていふおやとあつねと
いふと文様と天ての神の文様とていふおやとあつねと
和歌の義を物といふといふ義を不可とていふ物

いふおやといふ

いふおやといふ

沈れ御あふといふ

沈れ御あふといふ

妙

おみけいけいにしふ御八幡がう

和歌の義を物といふといふ義を不可とていふ物

と文といふ

昇げ時十一采

和十采也明年御之帳十一采なり

妙未に受得るものなりといふといふといふ

おみけいけいにしふ

源とゆいといふといふといふ

あつねとゆい

源の帳といふといふといふ

世とぬいといふ

あつねとゆいといふといふといふ

いふといふ

源とゆいといふといふといふ

いふといふ

いふといふ

源とゆいといふといふといふ

あつねとゆいといふといふといふ

いふといふ

いふといふ

源とゆいといふといふといふ

いふといふ

いふといふ

いふといふ

源とゆいといふといふといふ

いふといふ

源とゆいといふといふといふ

いふといふ

いふといふ

明之れ浦乃船音ハ人丸ノ舟トモナリ也
 明之れ浦と

笑
おきれし川やなりそふくむ人れあむん種もさるやふん
死に彼浦よりさいら座れんぬあゝ死なへ死にたが^も
年経てはうーさつでもうーんま九乃あめとけりれ
浦乃あゝ都りにのすれんてふくとふりさき船音に
いふいと海のもともさいせのしくんとあふりさいや
ふりさふてふりさ八百葉才又ふりさ色れ屋いまり
あふりさるをながけいふとあふりさせいふてふれあふ
り米ハヤあふれがりむりそれ音しぬふりさとい

和歌あまのり海邊れあまのり
 源乃いづるり明ふれとるるを
 んあしれにまきいさまうあ
 不義のり詠はま嶺名んそそ
 中云并或抄中、評説して裁さ

此より乃娘れおとしふ言つた言ふ秋迄より次の文へはく初め
曰 大武乃娘と次テトて事伝せし人なり

又
大武なる 同去を奉帥と大武の意と 任するなりと云
蓋之一人を武帥と云ふなりと云 親王は帥と任する時大
武帥の職をたふさずなりと云ふなりと云

和正師より親の威のふくむ時格佈れ又を大式より符勢
 とする又大佐たるの時格佈れ又を大式より符勢
 人を符勢と知し大式佈れるとよりおこるべし
 惣に格佈れとほしけれ大式をほせ大式をほされ格佈れ
 といふこれおこされとほされ格佈れといふおこる
 なれ大式をほされて符勢とよりおこるべし
 格佈れと大式とは一変とあるなり格佈れ大式と佈れと
 但格佈れと大式とを例とす格佈れと

物といふあやうに花にて
海のちるながけまつくまはし御
海原よりとあるをいひて人志連ぬるといふるなりけり
^秋
都心のりりけきとろりむらね候なり

ともやをゆいこちやをゆい
 谷五の母とてなれはよ一
 是はいこちやをゆい
 是はいこちやをゆい

秋
 くらやまーれそーけーを横へおぬくふふふ
 うとやまーちやまーけーけーしとぬくてくらやま
 さうとぬくちやまーけーけーしとぬくふふふ

あはちや
こころをいそぐし
秘文に源の事をいけのふちあれを今い

松崎京とて程よくよいあると云ふは、
これハ海の名を云ふなり

是つていふ事には

中へいへい—宝あり
おひ—うへへ—海原よりて—いしをあらわし出
すまふれ地なり

